はじめに

わが国の市街地は，欧米先進諸国の市街地と異なり，地区整備計画の視点からみると，極めて多様な環境の地区から成り立っている。これを大別すれば，土地区画整理，一団地など一応地区レベルの計画をもつ地区（計画市街地）と計画をもたずスプロールの集積によって形成された市街地に分けられ，これらがさまざまな割合で，またさまざまな形で共存しているのが実態である。

このような計画市街地の賦存量と形態は，今後の市街地整備計画（地区整備計画のマスター・プラン）のあり方に一つの拠りどころを与える重要なファクターと考えられる。

この報告書は昭和62年度に実施した研究結果を報告するものである。本年度の研究は上記の問題意識から，まず，都市計画の視点から計画市街地を定義し，広域的には一都三県について，精しくは東京都の行政区域（島しょを除く）について，その賦存量と賦存形態を分析したものである。

なお，調査作業は以下に掲げる東京理科大学工学部建築学科の卒業研究として実施したものであることを付記する。

卒業論文　大井尚志　坂本茂樹
「東京大都市圏における市街地整備の動向と今後の方策」

卒業論文　石松昇洋　田中正史　藤田暦喜
「東京都における計画市街地の分布と開発量についての地域的分析」

おわりに，この研究に必要な統計や資料を快く提供された建設省，東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県の各部局の方々に心から厚く御礼申し上げたい。また，研究報告書のとりまとめについては研究生，古川小百合さんに大変御苦労かけたことに感謝するものである。

昭和63年 3月31日

日 笠　端